縄文時代中期のキャンプサイト発掘

●調査の経緯

大栄から美咲、川上地区を対象とした畑総事業の埋蔵文化財事前協議があり、対象が広大な面積であったため、昨年北海道教育委員会の調査担当者と斜里町教育委員会（知床博物館）の共同による遺跡確認調査が実施されました。その際、４箇所の新しい遺跡が確認され登録遺跡となりました。そのうちの一つが今年発掘調査している大栄11遺跡です。

●発掘調査現在の状況

現在調査中の大栄11遺跡は今年の５月１日から作業を開始しました。場所は斜里町大栄で、トーツル沼南東を南北に走る防風林（大栄小学校の西側にある防風林）と１号道路とが交差する付近です。現況では平担地化した畑地が広がるだけで、一見しただけでは遺跡とはわかりません。地層調査の結果、防風林西側は急斜面になって落ちていました。そこには比較的大きな湿地が作られ、川が流れていたこともわかりました。一方、防風林東側は、緩やかな丘が北東方向に伸びていました。丘のすぐ南側には小規模な沢地形があり、川が流れていた可能性が考えられます。つまり、遺跡は西と南東側とを流れる川に挟まれた微高地にあり、その上に家を建て生活していたものと考えられます。遺跡がのる微高地はトーツル沼やその周辺にある湿地に向いており、狩をするには絶好な環境であったことが推察できます。

現在までの調査進行状況ですが、おおよそ半分ほどが終了しました。

●現在までに判明していること

現時点で竪穴住居と考えられる遺構は８軒見つかっています。５m程度の中型住居が２軒、３m前後の小型のものが６軒です。墓は１基です。いずれも縄文中期のものばかりで、出土した土器がトコロ６類式土器であることから、今から約4,000年前頃と推察できます。

この遺跡でのおもしろい発見は、小型の住居とその側に小さなピットが１セットとなり見つかっていることです。小型の住居は定型的な四角や丸などの形をしておらず、床面も平らに拵えておらず、適当に穴を掘ったというのがふさわしいものです。この縄文中期の竪穴住居は定型的なものばかりではないと考えられていますが、この遺跡のものは正にそう言えるものです。それから、住居とピットとのセット関係については現在事例調査中です。

では、なぜ定型的な住居を建てていないのでしょうか。一つ考えられるとすれば、当遺跡がキャンプサイト的な遺跡の性格が強かったため、定住用の定型的なあるいは、強固なまでの住居を必要としていなかったのでは・・・というのが現在の推測です。

最終的な考察は調査が終りを迎える10月以降に発表できたらとおもいます。

（松田功）

野外観察園にある巨大な竪穴復元住居の愛称募集に たくさんのご応募ありがとうございました。（結果は１面に）

昨年の秋、最初、博物館野外観察園内のヨシ刈りからはじめて足掛け３年、住居の骨組み材料のカラマツを切り倒し、皮をむき、柱や梁を組み立て、土留めをし、上屋をかけ、やっと完成した竪穴復元住居。多くの人々の知恵と力を結集した成果がその堂々とした姿から窺い知ることができます。

この竪穴復元住居は、先人の暮らしを知るための体験の場として今後活用を図っていきます。

日程についてはまだ未確定ですが、いくつかの体験講座を計画中です。その中のいくつかを紹介すると、９月に竪穴住居宿泊と縄文ハンバーグ作り、11月に楽器と装飾品作りを予定しています。今後利用を検討する向きがありましたら遠慮なく博物館までお問い合わせください。（松田功）

その他の応募作品名をご紹介します。
（愛称の応募総数は29件でした。）

「家」のつくもの：ケムリの家、あったかい家、昔の家など
「ハウス」のつくもの：きたろうハウス、タイムスリップハウスなど
「わら」のつくもの：わらやしき、わらの家など

事務局より
７月10日早朝草取りボランティアに参加いただいた皆さん、ありがとうございました。
８月10日・９月10日も会員の皆さんのご参加よろしくお願いいたします。

発行　斜里町立知床博物館協力会　2002.7.15改
099-4113
北海道斜里郡斜里町本町49　斜里町立知床博物館内
TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257
http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/